〈調査報告〉

傾聴体験がコミュニティ感覚に与える影響

―― 独自型大学認定「傾聴士」養成に関する実践的研究 ――

目　黒　達　哉

要旨

コミュニティ心理学の研究課題の一つにコミュニティ感覚がある。本論文ではカウンセリングにおける傾聴体験がコミュニティ感覚にどのように影響しているかを検討してみた。本学の独自資格である傾聴士の実習（傾聴実践実習）において、学生が傾聴体験を通してコミュニティ感覚をどのようにもっているかを実習終了後に学生の成長・変化に関する調査を自由記述形式で実施し、またそれを補完するために半構造化面接を行った。調査内容はKJ法を用いて分析した。まず、単文ごとに単独カードに記入した。それを小カテゴリー化し、さらに大カテゴリー化した。結果では、[社会的スキル]18例の大カテゴリーの中の小カテゴリーである≪社会貢献≫6例、≪ボランティア活動等の社会参加≫3例など、「コミュニティ感覚への影響」も起きるのではないかと予想される記述が一部にはあったという結論が導き出された。

このように学生は傾聴体験を通して、学生自身が身近なコミュニティに活かしていこうとする側面がみられた。したがって、眼前の相手の語りに耳を傾けることが、自分や相手の居住する地域コミュニティに対する感覚をどう形成するのか（しないのか）、形成するとすればどのようなメカニズムなの

か。これらの課題は、傾聴体験がコミュニティ感覚を形成するのではないかというテーマとしてコミュニティ心理学の理論と実践にとって、ますます重要な話題になると思われる。

なお、ここでいう傾聴体験とは、傾聴士養成における傾聴実践実習60時間を指す。

キーワード：カウンセリング、傾聴士、傾聴体験、コミュニティ感覚

Ⅰ　研究の目的

1．問題と本研究の目的

カウンセリングというとロジャーズのクライエント中心療法を指す場合が多い。ロジャーズ流のカウンセリングにおけるもっとも基本的な技法として傾聴があげられることはよく知られている。

近年、日本の大学教育においても医療系、看護系、教育系、福祉系など、将来対人援助従事者を目指している学生には、カウンセリングに関する科目を履修するようになっている。社会福祉分野では、高齢化社会における施設高齢者や独居高齢者の話し相手として、地方公共団体の福祉課、社会福祉協議会、NPO団体などがカウンセリングの傾聴技能を取り入れた傾聴ボランティアの養成が盛んに実施されている。

傾聴練習はさまざまな領域で取り入れられている。例えば、Nelis et al.（2011）は、大学生を対象に、傾聴練習（role play on active listening）を含む3日間の心理教育トレーニングによって、感情調節（emotion regulation）、幸福感、人生満足感（life satisfaction）、対人関係機能（social function）などが向上することを報告した。他者の感情に耳を傾けることは、情動コンピテンス（emotional competence）の技法のひとつとして対人関係をうまく機能させ、人生満足感を上げると考えられる（Kotsou et al, 2011）。

ところで、コミュニティ心理学の研究課題の一つに、コミュニティ感覚（a sense of community）がある。Sarason（1974）はコミュニティ感覚を、「他者との類似性の知覚、他者との相互依存的関係の承認、他者にしてほしいと期待することを、自分が他者に与えたり行うことによって、その相互依存関係を積極的に維持しようとする意志、そして自分は依存可能な安定したより大きな構造の一部であるという感覚である」と定義した。コミュニティ感覚に関する研究は、その後もさまざまな角度から展開している。McMillan & Chavis（1986）は、コミュニティ感覚の構成要素として、メンバーシップ（membership）、影響力（influence）、統合とニーズの充足（integration and fulfillment of needs）、情緒的結合の共有（shared emotional connection）を挙げた。これにもとづいてコミュニティ感覚尺度が作成され（植村, 2012）、例えば、コミュニティ感覚の高さと人生の満足感等の間に正の相関があることがわかっている（笹尾, 2007）。

福島・鵜養（2013）は、これらのコミュニティ感覚の研究をもとに、地域に対してさらに具体的・主体的な態度を測定する「地域コミュニティに対する態度」尺度を作成した。これは「住みよい地域づくりのために自分から積極的に活動していきたい」など、大学生も考えやすい項目になっている。そして、「臨床心理行政論」の講義を通して、受講生の地域コミュニティに対する態度が向上することを報告した。

コミュニティ心理学の課題は、個人と社会の繋がりを探究することである（Kloos et al, 2012）。カウンセリングにおける傾聴は、通常はカウンセラーとクライエントとの一対一の関係性のなかで行われる。しかし、本研究では眼前の相手の語りに耳を傾けること、傾聴することが個人だけでなく、個人を取り巻く環境への関心へと拡がり、社会性が育ちひいてはコミュニティ感覚が高まるのではないかと考える。

さて、この傾聴に関連して、本学では、2011年度（2011年4月～）から独自型大学認定「傾聴士」資格制度（以下、「傾聴士」と記す）をスタート

させた。2014年度末（2015年3月）に、本学では、「傾聴士」の第一号が誕生した。2014年度に完成年度を迎え、4年生に初の「傾聴実践実習」を課した。

この資格制度設置の背景には、①社会福祉学部の学生募集における定員割れの打開策として、②経済産業省が提唱している社会人基礎力の12項目の中に「傾聴力」を取りあげていることである。これらが相まって「傾聴士」は誕生した。本学では、傾聴士をカウンセラーの初歩的な資格と捉えている。社会福祉学部社会福祉学科には社会福祉専攻、子ども学専攻が設置されている。社会福祉専攻には、社会福祉コース、介護福祉コース、精神保健福祉コース、福祉教育コース、心理学コース、国際社会貢献コースがある。子ども学専攻には幼児教育コース、子ども福祉コースがある。学生はこれらのコースで社会福祉士、介護福祉士、精神保健福祉士、保育士、教員免許、認定心理士の資格取得を目指している。学生にはこのような社会福祉関連の資格に加えて、傾聴士を取得するように促している。大学としては、福祉現場、教育現場に従事した際に傾聴力に優れた質の高い人材養成に努めている。心理学コースにおいて、認定心理士の資格取得を目指している学生に対しては、併せて傾聴士も取得し、臨床心理士養成の大学院修士課程への進学を勧めている。傾聴士は文学部の学生も取得可能である。前述の資格取得を前提とし併せて傾聴士を取得する者には傾聴士（一種）、前述した資格をいっさいに取得しない者には傾聴士（二種）が与えられることになっている。

傾聴実践実習において、学生は、高齢者施設等で高齢者の話を「傾聴」することを中心に傾聴体験をする。筆者は、傾聴実践実習の実習巡回の折に学生が傾聴体験を通じて自己成長いく姿を垣間見た。

そこで、本研究では、カウンセリングにおける傾聴とコミュニティ心理学の研究課題であるコミュニティ感覚との関連について検討したい。つまり、傾聴体験がコミュニティ感覚を形成するうえで何らかの影響を与えるであろ

うという仮説を検証していきたいと考えている。

なお、本研究における「傾聴体験」とは、傾聴実践実習60時間における高齢者の話し相手やコミュニケーションを図った体験などを指している。

2．傾聴士養成の概要[1)]

学生の傾聴士資格取得の概要は次のようである。

学生は、傾聴士「一種」取得（社会福祉士等の社会福祉関連資格や教員免許を取得する者）には23～27単位、傾聴士「二種」取得（他資格を取得しない者）には21単位が必要である。尚、文学部学生も資格取得が可能となっている。

1）第1段階：1年～4年「文学部・社会福祉学部の開講科目の中で傾聴士資格取得のために必要な指定した科目」を履修することが前提となる。

2）第2段階：3年～4年：「傾聴に関する科目」

①傾聴活動論＜2単位＞15コマ（1コマ：90分）

②傾聴実習指導（事前学習・事後学習）＜1単位＞

事前学習4コマ、事後学習4コマ

③4年前期～4年後期：

傾聴実践実習＜2単位＞（60時間実施）

a. 学内実習（2014年7月下旬～8月上旬）

ア．大学において学生同士の傾聴実践実習　（3時間）

イ．老人クラブを大学に招いての傾聴実践実習（17時間）

b. 学外実習（2014年8月中旬～12月上旬）

高齢者ディサービスにおける傾聴実践実習

（1日4時間×10日＝40時間）、学生2人ペアとなって4期に分かれて実施した

3）第3段階：4年後期「面接試験」（2015年1月下旬）

「指定科目」、「傾聴に関する科目」の単位を取得し、卒業見込の学生には 面接試験を実施した。

面接試験の内容は、以下のようであった。

a. 学びを通じて傾聴士とはいったい何か

b. 資格取得後に資格をどのように活用したい

と思うか、以上のような質問を受講者に実施し、資格を認定した。

尚、「2）③」の箇所で述べたように、今回の学生の傾聴体験時間は60時間であった。

Ⅱ　研究方法

1．調査目的

学生が傾聴体験を通してコミュニティ感覚をどのようにもっているかを調査することを目的とした。

2．調査方法

前述した面接試験直前に学生への自由記述質問調査を実施し、面接試験終了直後にそれに基づいて補完するために半構造化面接を実施した。

3．調査日時

2015年1月下旬

4．調査場所

本学　H207教室

5．調査対象

傾聴実践実習受講者8名［（本学文学部4年生1名、社会福祉学部4年生7名）、（男2名、女6名）］であった。

6．調査手続き

傾聴実践実習終了後に「あなたの大学生活、ボランティア活動、その他の実習、日常生活において、自分自身が変化・成長したと感じられることを述べてください。」という自由記述質問紙に記述してもらい、それを補完する形で、一人15分程度の半構造化面接を実施した。ここでいう傾聴実践実習終了後とは、傾聴実践実習開始日から調査日までであることを学生には教示してある。

7．分析方法

KJ法による分析を実施した。まず自由記述質問紙から記述内容とそれを補完する半構造化面接の結果から単文ごとに抽出をし、単独カードに記入した。それを小カテゴリー化し、さらに大カテゴリー化した。なおカテゴリーの抽出には、著者と本学の心理学系教員の2名で飽和状態になるまで繰り返し行った。

8．倫理的配慮

学生には、研究目的を説明し、匿名で調査内容を使用することで了解が取れている。

Ⅲ　研究結果

自由記述と半構造化面接による聞き取りの結果をKJ法により分析した。

傾聴体験による自己変化・自己成長の内容を32例抽出することができた。それを表１のように７つのカテゴリーと下位カテゴリーに分類することができた。

表１より件数の多い順に≪１．傾聴の姿勢、空間≫7例、≪２．社会貢献≫6例、≪３．人間関係の深まり≫6例、≪４．コミュニケーション・スキ

ル≫4例、≪５．より以上の傾聴技術の向上≫3例、≪６．人間関係の拡がり≫3例、≪７．ボランティア等社会参加≫3例、≪８．自己成長≫2例に分類された。

7つのカテゴリーそれぞれの下位カテゴリーの内容は次のようになっている。

≪１．傾聴の姿勢、空間≫7例は、「傾聴できる姿勢、空間が自分で知らない間にできるようになった(5)」と最も件数が多くなっていることが分かる。その他、「人の話を聞くことの大切さが少しわかった（1）」、「自分自身の傾聴の態度を振り返り、反省した（1）」となっている。

≪２．社会貢献≫6例は、「傾聴の態度を今後の生活や仕事の場面で役立てたい（2）」、「援助場面だけでなく日常的な会話でも必要な技術である（2）」、「これから（大学を卒業して）社会に出て多くの人の話を聴き

表１　KJ法による「7カテゴリー」と「下位カテゴリー（記述・語り内容）」

カテゴリー	下位カテゴリー
１．傾聴の姿勢・空間（7例）	・傾聴できる姿勢、空間が自分で知らない間にできるようになった（5） ・人の話を聞くことの大切さが少しわかった（1） ・自分自身の傾聴の態度を振り返り、反省した（1）
２．社会貢献（6例）	・傾聴の態度を今後の生活や仕事の場面で役立てたい（2） ・援助場面だでなく日常的な会話でも必要な技術である（2） ・これから（大学を卒業して）社会に出って多くの人の話を聴きたい（1） ・傾聴士の資格を世の中に広めいきたい（1）

3．人間関係の深まり（6例）	・自分自身の気持ちも話せるようになり、以前より関係が深くなった（1） ・ボランティア活動で相談を受けた後で話して良かったと言われた（1） ・利用者（高齢者）がどんなことに関心があるか分かるようになった（1） ・祖母が話を聴いてくれるようになって嬉しいというようなった（1） ・人と話すことが「怖い」という思いが以前はあったが、少し少なくなった（1） ・以前より人と話すことが好きになった（1）
4．コミュニケーション・スキル（4例）	・話す時に相手のことを考えて、話せるようになった（1） ・バイトの接客でも以前と比べて 傾聴できるようになった（1） ・友人との会話時にじっくり聴くことができるようになった（1） ・利用者（高齢者）がどのような話をするとどのような表情、感情なるかが分かるようになった（1）
5．より以上の傾聴技術の向上（3例）	・傾聴の腕をもっとみがきたい(2) ・今回は高齢者との傾聴実習であったが子どもとも少しかかわりたかった（1）
6．人間関係の拡がり（3例）	・ボランティア活動で話したことのない人から話しかけられるようになった（1） ・男の人と話すのが苦手であったが話せるようになった（1） ・もっと人の話を聴いてみたい（1）
7．ボランティア活動等社会参加（3例）	・ボランティア活動に参加した（1） ・ボランティア活動で意見が言えるようになった（1） ・ボランティア活動以外のノートテイクアルバイト（施設とヘルパー）に挑戦した（1）
8．自己成長（2例）	・積極的に何かをすることや意見を言うことなどが少しずつできるようなった（1） ・何かに脅えないで物事につき進むことができるようになった（1）

たい（1）」、「傾聴士の資格を世の中に広めいきたい（1）」となっていることが分かる。

≪3．人間関係の深まり≫6例は、「自分自身の気持ちも話せるようにな

り、以前より関係が深くなった（1）」、「ボランティア活動で相談を受けた後で話して良かったと言われた（1）」、「利用者（高齢者）がどんなことに関心があるか分かるようになった（1）」、「祖母が話を聴いてくれるようになって嬉しいというようなった（1）」、「人と話すことが「怖い」という思いが以前はあったが、少し少なくなった（1）」、「以前より人と話すことが好きになった（1）」となっている。

≪4．コミュニケーション・スキル≫4例は、「話す時に相手のことを考えて、話せるようになった（1）」、「バイトの接客でも以前と比べて傾聴できるようになった（1）」、「友人との会話時にじっくり聴くことができるようになった（1）」、「利用者（高齢者）がどのような 話をするとどのような表情、感情なるかが分かるようになった（1）」とコミュニケーション・スキルの高まりを表すような内容となっていることが分かる。

≪5．より以上の傾聴技術の向上≫3例は、「傾聴の腕をもっとみがきたい（2）」、「今回は高齢者との傾聴（実践）実習であったが子どもとも少しかかわりたかった（1）」となっている。学生の中には、高齢者のみでなく、児童との傾聴体験も望んでいることが分かった。

≪6．人間関係の拡がり≫3例は、「ボランティア活動で話したことのない人から話しかけられるようになった（1）」、「男の人と話すのが苦手であったが話せるようになった（1）」、「もっと人の話を聴いてみたい（1）」となっている。

≪7．ボランティア等社会参加≫3例は、「ボランティア活動に参加した（1）」、「ボランティア活動で意見が言えるようになった（1）」、「ボランティア活動以外のノートテイクアルバイト（施設とヘルパー）に挑戦した（1）」と社会参加への拡がりを見せる記述が見られた。

最後に≪8．自己成長≫2例として、次のような内容であった。それは、「積極的に何かをすることや意見を言うことなどが少しずつできるようなった（1）」、「何かに脅えないで物事につき進むことができるようになった

（1）」となっている。

Ⅳ　考察

まず初めに考察の論点を明確にしておきたい。ここでは、傾聴実践実習開始日から調査日の間に日常生活等において傾聴体験（傾聴実践実習の60時間）が自己の変化・自己成長に影響を及ぼしたと思われること、さらに発展させてコミュニティ感覚に与える影響について考察を進めていきたい。

1．大カテゴリーの抽出

表1の7カテゴリーからさらに大カテゴリーの抽出を試みた。その結果、図1のように、大カテゴリーとして[傾聴のスキル] 14例、[社会的スキル] 18例の2つ、その他いずれにも属さない[自己成長]2例とそれぞれ命名し、分類することができた。

[傾聴のスキル]に関する内容は、小カテゴリーとして≪傾聴の姿勢、空間≫7例、≪コミュニケーション・スキル≫4例、≪より以上の傾聴技術の向上≫3例となった。[社会的スキル]に関する内容については、小カテゴリーとして≪社会貢献≫6例、≪人間関係の深まり≫6例、≪人間関係の拡がり≫3例、≪ボランティア活動等の社会参加≫3例となった。

2．傾聴体験による自己の変化・自己成長について

これらのことから傾聴体験が学生の自己の変化・自己成長にどのような影響を及ぼしているのか考察を深めたい。図1のように[傾聴のスキル]に関する大カテゴリーが抽出できたのかと言えば、傾聴体験そのものが学生の傾聴やそれに関連するコミュニケーションを高めるなどの直接的な要因となっているのではないかと考えられる。

次に、[社会的スキル]に関する大カテゴリー抽出できたことは、学生の社

会性の高まりを意味していると考えられる。このことは、学生同志の傾聴体験のみでなく、地域にある高齢者施設に出向いての実習、また地域の老人クラブの高齢者を対象とした実習など、傾聴体験を通じての身近な地域の人々とのかかわりが社会性の高まりに影響していると考えられる。

さらに、件数は2例と少ないが[傾聴のスキル]、[社会的スキル]以外に[自己成長]の内容が抽出できたことは注目すべき点である。図1より[自己成長]のカテゴリーの内容を見ると、「積極的に何かをすることや意見を言うことなどが少しずつできるようなった（1）」、「何かに脅えないで物事につき進むことができるようになった（1）」となっている。これらの内容から、傾聴体験は眼前にいる人と向かい合って、時には視線を合せて、本音でコミュニケーションを図る体験であって、人との直面性が高い体験と考えられる。件数こそ少ないが、学生は傾聴という方法を用いて直面性の高い体験を積み重ねた結果としてこのようなカテゴリーを抽出できたのではないかと考える。

3．傾聴体験がコミュニティ感覚に与える影響について

ここでは先に述べた学生の「傾聴体験により自己の変化・自己成長」の観点をさらに発展させて、傾聴体験とコミュニティ感覚の関連について考察を試みたい。

McMilla&Chavis(1986)によって、コミュニティ感覚の構成要素として、

傾聴のスキル（14）

傾聴の姿勢、空間（7）

・傾聴できる姿勢、空間が自分で知らない間にできるようになった(5)
・人の話を聞くことの大切さが少しわかった
・自分自身の傾聴の態度を振り返り、反省した

コミュニケーション・スキル(4)

・話す時に相手のことを考えて、話せるようになった
・バイトの接客でも以前と比べて傾聴できるようになった
・友人との会話時にじっくり聴くことができるようになった
・利用者（高齢者）がどのような話をするとどのような表情、感情なるかが分かるようになった

より以上の傾聴技術の向上（3）

・傾聴の腕をもっとみがきたい（2）
・今回は高齢者との傾聴実践実習であったが子どもとも少しかかわりたかった（1）

自己成長（3）

積極的に何かをすることや意見を言うことなどが少しずつできるようなった（1）
何かに脅えないで物事につき進むことができるようになった（1）

社会的スキル（18）

社会貢献（6）

・傾聴の態度を今後の生活や仕事の場面で役立てたい（2）
・援助場面だでなく日常的な会話でも必要な技術である（2）
・これから（大学を卒業して）社会に出って多くの人の話を聴きたい
・傾聴士の資格を世の中に広めいきたい

人間関係の深まり（6）

・自分自身の気持ちも話せるようになり、以前より関係が深くなった
・ボランティア活動で相談を受けた。後で話して良かったと言われた
・利用者（高齢者）がどんなことに関心があるか分かるようになった
・祖母が話を聴いてくれるようになって嬉しいというようなった
・人と話すことが「怖い」という思いが以前はあったが、少し少なくなった。
・以前より人と話すことが好きになった

人間関係の拡がり（3）

・ボランティア活動で話したことのない人から話しかけられるようになった
・男の人と話すのが苦手であったが話せるようになった
・もっと人の話を聴いてみたい

ボランティア活動等の社会参加（3）

・ボランティア活動に参加した
・ボランティア活動で意見が言えるようになった
・ボランティア活動以外のノートテイクアルバイト（施設とヘルパー）に挑戦した

図１　傾聴体験による自己の変化・自己成長

「メンバーシップ」、「影響力」、「統合とニーズの充足」、「情緒的結合の共有」の4つを挙げている。これらについて、植村（2012）によってその詳細やコミュニティ感覚尺度の試訳がなされている。また、笹尾（2007）のコミュニティ尺度の研究がある。しかし、図1のカテゴリーをこれらのコミュニティ感覚の構成要素の特徴として類似するものもあるが当てはめて考えにくい。

本研究では眼前の相手の語りに耳を傾けること、傾聴することが個人だけでなく、個人を取り巻く環境への関心へと拡がり、社会性が育ちひいてはコミュニティ感覚が高まるのではないかという仮説をもとに調査研究を実施した。そこで、図1のように、結果としては、カテゴリーの中に□で囲んだように、[社会的スキル]18例の大カテゴリーの中の小カテゴリーである≪社会貢献≫6例、≪ボランティア活動等の社会参加≫3例など、「コミュニティ感覚への影響」も起きるのではないかと予想され記述が一部にはあったという結論が導き出せた。すなわち、全件数32例の内9例（28.1％）、社会的スキル18例の内9例（50％）はコミュニティ感覚に関連するものと考えられる。

学生は傾聴体験を通して、[社会的スキル]のカテゴリーに表れているように、学生自身が身近なコミュニティに活かしていこうとする側面がみられる。ともあれ、眼前の相手の語りに耳を傾けることが、自分や相手の居住する地域コミュニティに対する感覚をどう形成するのか（しないのか）、形成するとすればどのようなメカニズムなのか。これらの課題は、傾聴体験がコミュニティ感覚を形成するのではないかというテーマとしてコミュニティ心理学の理論と実践にとって、ますます重要な話題になると思われる。

Ⅴ　今後の課題

今回の調査研究における研究対象、研究結果、結果の分析に関して、学生

への「面接試験直前の質問紙調査」「面接試験」「試験終了直後の半構造化面接」の流れになっていたが、調査者が①調査者、②面接官兼成績評価者と二重に近い役割を取っていたため、調査協力者である学生は、合格を狙って自分の体験を語るなど、調査計画に限界があったのではないかと考える。今後の調査ではこのような点を改善していきたい。

今後の研究動向としては、質的研究にとどまることなく、量的研究に着手し、質的な側面、量的な側面の両面から傾聴体験とコミュニティ感覚の関連について研究していきたいと考えている。

具体的には、傾聴士関連やカウンセリング関連の授業における傾聴体験のプレとポストで共通のコミュニティ感覚尺度の質問紙を用いて調査を実施し、統計的分析を行い、カウンセリングの傾聴体験がコミュニティ感覚に及ぼす影響の有無を検討していきたいと考えている。

注記

1）同朋大学　学生生活,2014.

引用文献

福島里美・鵜飼美昭　2013　臨床心理行政論の授業が女子大学生の地域コミュニティに対する態度に及ぼす影響　コミュニティ心理学研究, 17(1), 46-62.

Kloos, B., Hill, J., Thomas, E., Wandersman, A., Elias, M. J. 2012. Community psychology: Linking individuals and communities, Third edition. Belmont, CA: Wadsworth.

Kotsou, I., Nelis, D., Gregoire, J., & Mikolajczak, M. 2011. Emotional plasticity: Conditions and effects of improving emotional competence in adulthood. Journal of Applied Psychology, 94(6), 827-839.

McMillan,D.W. & Chavis,D.M. 1986 Sence of community: A definition and

theory. Journal of Community Psychology, 30, 23 - 43.

Nelis, D., Kotsou, I., Quoidbach, J., Hansenne, M., Weytens, F., Hansenne, M., Weytens, F., Dupuis, P., & Mikolajczak, M. 2011. Increasing emotional competence improves psychological and physical well-being, social relationships and employability. Emotion, 11(2), 354-366.

Sarason,S.B. 1974 The psychological sence of community: Prospects for a community psychology. SanFrancisco:Jossey-Bass.

笹尾敏明 2007 コミュニティ感覚 日本コミュニティ心理学会（編）コミュニティ心理学ハンドブック,115-129. 東京大学出版会.

植村勝彦 2012 現代コミュニティ心理学 東京大学出版会.

※なお、本論文は、日本コミュニティ心理学会第18回大会ポスター発表、「独自型大学認定「傾聴士」に関する実践的研究―傾聴体験がコミュニティ感覚に与える影響についての質的研究―」を修正、加筆したものである。

（本学教授：コミュニティ心理学・臨床心理地域援助・カウンセリング論・ボランティア活動）